
後悔のない、この人生を

紫水晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

後悔のない、この人生を

【Nコード】

N3733C

【作者名】

紫水晃

【あらすじ】

生き続けることに、なんの価値も意味も見い出せないでいる少年・高堂生人が、自らを“告げる者”と名乗る男と出会ったことでその在り方や考え方を少しずつ変えていくようになる。……後悔のない、この人生を歩むために。

序章・0話『生人』（前書き）

始めに。前書きはここだけにするので、次からはないです。

これはおそらくは、私の小説の原盤になると思われます。

というのも、実は私には中学生の頃から考えている小説があるのですが、今現在で創っている『山羅くんの不幸』の笑いも、この『後悔のない、この人生を』にでてくる話も、その小説の派生のようなものなんです。

その小説は私をもっと実力をつけたら創ろうと思いますが、まだまだ未熟なので先になりそうです。

ですので、先に言っておきますが、いつかその小説を創ったときに『あれ、これってどこかで読んだことがあるぞ？』な文がでてきたら勘弁してください。『ああ、あったなこういうの』と思い出して懐かしむぐらいにしてください。

最後に、『後悔のない、この人生を』は超不定期連載になると思います。一話完結ですが、その一話が長かったり短かったりするかも知れませんが予めご了承ください。

これにて、前書きは終わりたいと思います。

序章・0話『生人』

———生き続けることに、なんの意味などなかった。その人生も、また。

目覚まし時計が鳴る前に目を覚ました俺は、薄暗い天井をぼんやりと眺めていた。やがてもぞもぞと毛布から手を出すと、手探りで目指し時計を掴み、後十秒程で鳴ろうとしている目覚ましのスイッチをオフにする。

そうしてぼうつとしながら体を起こそうとして、腹に違和感を感じそこに目を向けた。

「……………運^{ウン}か」

一匹の猫が腹の上で丸まって眠っていた。雪のように真っ白なその猫は俺の声にぴくりと耳を動かすと、閉じた目をうつすら開けて、まるで欠伸をするように、

「……………ミャア」

とだけ鳴いた。

「……………」

和む。

再び目を閉じて眠る運に胸の内が温かくなるような気持ちを抱きながら、俺は運をできるだけ動かさないようにしつつ体を起こした。この時、時計の針はちょうど六時を差していた。

☆

俺、高堂生人^{たかどうナリヒト}が早寝をするようになってもう三ヶ月が経とうと
していた。思うところがあって早寝早起きをするようになってもう三
ヶ月。早寝をすれば自然と早起きをすることを十七年生きてきてよ
うやく気付き、それからは遅刻の心配もなくなった。……遅刻ばか
りしていたあの頃と比べると、随分と進歩したものだ。

「お、今日も早いねえ」

制服に着替えて台所に入ると、朝食をちょうど作り終えたらしい
母親の高堂美咲^{たかどうミサキ}が嬉しそうに口元を綻ばせた。

「彼女でもできた？」

「なわけないだろ」

俺のちよつとした変化にこの母親はどうやら女が出来たと変に勘
繰っているようで、事あるごとにそう聞いてくる。

「有紀ちゃんでしょ？ そうなんでしょ？」

「だから違うって」

俺はしつこく聞いてくる母親をあしらいながら椅子に座ると、い
ただきます、と口にした。

有紀というのは、俺の幼馴染み……の友達のこと、俺と彼女
とは一緒に学校へ登校する仲でもあり、ただそれだけの関係なのだ
が、どうやらこの母親はそれ以上の関係だと疑っている節がある。

「でも、最近有紀ちゃんと一緒にいるのをよく見掛けるわよ？」

「たまたまだよ。たまたま」

「え、もうタマタマを見せてる仲なの？」

「……もう黙ってくれよ」

にやにや笑う母親にうんざりしながら朝食を食べ始める。母親も
箸を手にとろうとして、黙々と食事をしている息子に一言聞いた。

「……美味しい？」

「……ん」

味噌汁をすすりながら肯定するように頷く。それを見て満足そう

に母親は笑顔になると、

「有紀ちゃんなんでしょ？」

「だから黙れって」

結局、朝食の間、母親は黙ることはなかった。

☆

見ていたニュースから目を離して時計を見ると、もう少しで七時になるうとしていた。そろそろ登校しようと台所を出ようとする俺の背中に、

「いってらっしゃい」

という声が掛けられた。

顔だけ少し後ろに振り向けると、食器を洗う作業を休めて手をひらひら振って見送りしてくる母親の姿が見えた。

「……………」

俺は……ほんの少し目を細めると、顔を前に向け、いってきます、と小さく呟いた。

玄関で靴を履き、学校指定のバッグを肩に掛け、扉を開き、外に出る。今は三月の初頭。身を切るような空気の冷たさに一瞬身震いして、地を踏みしめるように歩き始める。

……と、その時。

「生人さーん！」

俺の名を叫ぶ大声。若干の苦笑いを浮かべ、声がした方へ振り向くと軽く手を上げた。

「よう、おはよう」

そこにはこちらに向かって走ってくる少女の姿があった。そんなに急がなくていいのにと、内心また苦笑する。

「はぁ……はぁ……おはよう、ございます……」

すぐ近くまで来ると急ブレーキし、息を整えながら挨拶を返してくる。

「……ちよつと、遅れちゃいました」

そう言つてえへへと笑うこの少女が、さっきの朝食のときに話題になつていた神尾^{かんのユキ}有紀である。

艶やかな黒髪は肩に届くか届かないかのところまであり、ぱつちりとした瞳にキリッとした目鼻をしていて、綺麗なんだが、いつも浮かべている柔和な表情で可愛いさの方が目立つ。色恋沙汰にあまり興味ない俺でもなかなか可愛いと思わせる顔立ちなのだから、学校でもかなりの人気があるようで、『有紀ちゃん親衛隊』と呼ばれる集団がいるとかいないとか。まさかそんな漫画みたいな……と思うが、実際、そんな奴らがいる学校は結構あるらしい。バカバカしいと正直思う。

「……………」

俺はじつと有紀を見つめる。

こちらへ嬉しそうに微笑みを向けてくるその姿は、なぜか人懐っこい犬の姿を連想させられる。耳と尻尾を付けたら、さぞかし似合うのではなからうか。

「あ……あの、な、なんですかっ?」

あと、有紀は赤面症らしく、こうじつと見ているとよく顔を真っ赤にさせる。しばらくすると挙動不審になつて意味不明な言動を口走るようになるのだが、今はやめておくとしよう。

「……行くか」

「は、はいっ」

学校までの距離は歩いて五分のすぐ近くだ。ぶっちゃけると、近いという理由だけで俺はここを受けた。俺はその距離を、有紀と他愛ない話をしながら歩く。それはもはや、いつもの習慣のようになっていた。

それから、時たまにだが――

「お、二人共おはよー」

という感じで、俺の幼馴染と会うこともある。

「よう」

「あ、おはよう！」

俺は軽く手を上げ、有紀はぱたぱたと手を振って挨拶を返した。

「本来なら私と生人が一緒に登校するのが正しいシチュエーションなのに、これまた面白い設定よねー」

「なに言ってるんだ？」

「うーうん。こっちの話ー」

あははと笑いながら俺の右隣に並んで一緒に歩き始める。左隣には有紀がいるので、まさに両手に華の状況だ。

こいつこそが俺の幼馴染みであり、有紀の大親友である永野葉瑠ながのハルだ。明朗快活で、ともかく活発な女だ。こいつもこいつでなかなか魅力的な容姿をしているので、有紀と一緒にいると結構目立つ。こいつも学校が家から近いので、こうばったり会うのも珍しくはない。

「あれえ、もしかしてお邪魔だったあ？」

と、意地の悪そうな笑みを有紀に向ける。

「えっ、あ、そんなことないよ！」

慌てて首を振る彼女だが、振る方向が上下なのは気付いていないようだ。

「んー、複雑な心境ねー……」

親友なのにと難しい顔をする葉瑠。有紀はなぜそんな顔をするのか分からないらしく、きょんとしていた。

この二人が知り合ったのは中学時代。出会ってすぐに打ち解け、間もなく親友と呼び合える仲になったと葉瑠から聞かされている。有紀はしっかりしているようでどこか抜けているところがあるので、抜けているようでしっかりしている葉瑠とは相性が良いのだと俺は分析している。

「……あーあホント、こいつのどこがいいのかしら」

難しい顔をしたままちらりと俺を見てくる視線を感じた。

「……そんで、こいつはどこがいやなのかしらねー」

俺は聞こえないふりをして歩を進める。有紀は……おそらくは頬を赤らめて……うつむきながら歩を進める。会話はそこで途切れた。

「はい、到ー着ー」

微妙な沈黙も数十秒程度で、葉瑠の言葉通り、俺達は校門をくぐって学校の敷地内へと入っていた。

それじゃねー、と葉瑠は第二校舎へと向かう。俺と有紀は同じクラスで第一校舎にあるが、葉瑠は別のクラスで第二校舎にある。短い間だったがここでお別れだ。

「またね、葉瑠ちゃん」

「うん、昼休みにまた会おうねユッキー」

二人は笑顔で手を振り合いながら別れた。

「……………」

俺はそんな二人を、まるで懐かしいものを見るかのように目を細めて見ると、首を振って第一校舎へと向かう。

すぐ後ろに有紀がとことこと付いて来ているのを気配で感じながら、俺はただ前を向いて歩く。

……そうしないと、何かが溢れ落ちてしまいそうだった。

☆

キンコンカンコン……。

チャイムの音と共に、今日一日の授業が終わったことを知らされる。時間の流れが早いなと少し呆れながらバッグに教科書やらを入れ始める。

特別、なんの変わりもない一日だった。昼休みに一悶着あったが、それはいつものこと。将来仕事ではあまり活用しないであろうことを覚えただけの一日だった。

「……………さて」

俺は立ち上がると、さっさと教室から出ようとして、

「生人さんっ」

そう俺を制止する声に止められた。

声の主は有紀だった。俺の側まで小走りで来ると、正面から俺を

見上げるようにして見つめてきた。

「あの、今日は、」

「ああ……すまん」

有紀の言葉を遮るように俺は口を開いた。

「ちよいと急用があつてね。今日は、無理だ」

見るからに落胆した様子を見せる有紀に若干の後ろめたさを感じるも、用があるのは本当なんだからと気にしないようにして、横を通り過ぎる。

「……………」

背中に有紀の視線を感じながら、俺は振り返ることなく歩き、

「……また明日」

とそこで少し顔を振り向け、そう言った。

「あ……………はいっ。また明日！」

ぶんぶん手を振る有紀に微かに笑みを浮かべ、それを見られないように顔を戻すと、俺は再び歩き始めた。

教室を出て、第一校舎を出る。俺と同じ帰宅部の生徒達に紛れて校門まで行き、そこからは一人歩き始める。

「……………」

ふと、空を見上げた。

そこには曇り空。……ああ、そうだったな。俺は今朝のニュースを思い出す。今日は、雪が降るんだったな。

登校のときとは違い一人での下校。それに否応なく冬の冷たさを感じさせられる。……俺はその冷たさを、懐かしいと感じながら道を歩んでいた。

「……………ハ」

空を見上げたまま自嘲する。

……懐かしい、か。そうだな。この冷たさは、……他人には無関心で、いつも独りで行動していたあの頃の、……人は独りでも生きていけると思っていたあの頃の心の内と、よく似ているのだ。

今となっては、人は独りで生きていけると思っていた自分に腹立

たしさを感じているが、あの頃はバカみたいに本気だった。

……そして、更に腹立たしいのは、そのことを諭してくれた奴が、いけ好かない奴だということだ。

「……………」

無然とした表情を浮かべ、空から前方へと視線を戻す。

するとすぐ目の前に家が視界に入る。我が家だ。そこを睨みつけるように見据えると、俺は懷から鍵を取り出し、扉を開けた。

そうして薄暗い家の中へ入る。靴を脱ぐと、そのまま電気を点けずに奥の部屋……俺の部屋を目指して歩き、扉の前でピタリと立ち止まった。

……言い忘れていたが、現在、この家は俺と母親との二人で暮らしている。今は母親は仕事のため外出しているので、今は家には俺しかない。

ガチャ。

俺はドアノブを捻ると、扉をゆっくりと開いた。
すると、

「よお……」

俺しかいないはずのこの家に、“そいつ”はいた。

黒で統一された外装をしたそいつは、ニヤリとした笑みを俺に向けてると、

「……久しぶりだな、死人^{シビト}よ」

今の俺にとって痛烈な皮肉となる言葉で、そいつは俺をそう呼んだ。

『生人』ではなく、

『死人』と。

「……………」ハ。お前もな」

そいつには名がないらしい。

だから俺は更に皮肉を返すように、そいつのことを――

「――死神」

そう、呼んでいる。

(第一章・1話へ)

序章・0話『生人』（後書き）

人はいつか必ず死ぬ。それは当然のこと。全ての生き物に必ず訪れる、終わり。ならばそこに、始まりなどない。この世に生まれたと同時に、絶対の死を約束されるのだから。

次回、

第一章・1話『人生』

……死ぬべくして生まれてきたのなら、その人生に、なんの意味があるというのか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3733c/>

後悔のない、この人生を

2010年10月12日07時13分発行